



TITLE:

近江商人の活躍について

AUTHOR(S):

菅野, 和太郎

---

CITATION:

菅野, 和太郎. 近江商人の活躍について. 経済論叢 1929, 28(6): 859-874

ISSUE DATE:

1929-06-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129756>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號六第

卷八十二第

行發日一月六年四和昭

## 論叢

戸數割の性質

法學博士

神戸正雄

勞銀の理論

文學博士

高田保馬

マルサスの恐慌論

經濟學士

谷口吉彦

## 說苑

近江商人の活躍について

經濟學士

菅野和太郎

兩圓との關係に就て

經濟學士

堀江保藏

## 雜錄

免償價值について

文學博士

高田保馬

生産立地理論について

經濟學士

菊田太郎

中央と地方の豫算形式

經濟學士

中川與之助

國民經濟と大都市經濟

經濟學士

大谷政敬

大阪市の人口動態

經濟學士

武田長太郎

佛蘭西國營輸出信用保險

經濟學士

近藤文二

## 法令

救護法・農業調査令

## 附錄

本誌第二十八卷總目錄

説

苑

## 近江商人の活躍について

菅野和太郎

### 一 緒 言

世に「近江泥坊伊勢乞食」といふ諺がある。何時頃から言ひ始められたかは分らないが、此の諺は徳川時代殊に其の末期頃に専ら言ひ觸らされたもののやうである。而して此の諺は勿論近江及び伊勢出身の商人の人情を言ひ現はしたものであるが、又同時に徳川時代に於て、近江及び伊勢出の商人が商業活動上に雄飛して居たといふことをも指示して居る。即ち近江泥坊といふ惡口が世に流布するに至つたのは、近江出の商人が他國の商人と比較して特に優れた點があつたためである。換言すれば近江出の商人が他國商人の到底追隨し得ない活躍をなしたが故に、喬木風に妬まれるの譬に洩れず、世人より怨羨されてかゝる惡口が言ひ觸らされるに至つたのである。又近江出の商人を特に「近江商人」と稱して居ることも、近江出の商人が他國商人に比して傑出して居

たことを證明して居る。然らば近江商人は他國の商人に比して如何に傑出して居たか。之に就いて詳細に世に紹介された論著は至つて少い。今近江商人が徳川時代經濟活動上になした事蹟に關する研究の一端を左に説述しよう。

## 二 近江商人と商業

我國の商業が特に發達し始めたのは徳川時代殊に其中頃以後である。此の時代は漸く鑄貨の使用が全國一般に普及して、日本人の經濟生活が交換を以て其の本質となすに至つた頃であつたため、商業も亦大に發達して、近代的の形態を帶ぶるに至つた。從來の商業は主として商人と生産者、或は又商人と消費者との間に行はれたにすぎなかつたが、徳川の中頃よりは商人と商人との間の取引が行はれるに至つた。従つて其の取引範圍即ち市場は擴大されて全國的となり、問屋、仲買、小賣商等の機關も同時に發達して、生産者と消費者との間に種々なる仲介者を生ずるに至つた。<sup>1)</sup>

我國の商業が、かくの如く近代的に發展せし時に、所謂近江商人が大活躍をなしたのである。當時商業の中心地は大阪であつて、大阪を中心として商品は全國的に流通して居た。然るに其の大阪に於ける商業を見るに、當時殆んど總べての商取引に近江商人が關係して居る。近江商人が大阪の商業界に如何に活躍したかは、大阪市史の至る所に於て、近江屋といふ屋號を有する商人のことが載せられて居ることによつても知られる。<sup>2)</sup> 近江屋といふ屋號を有する商人は言ふ迄もな

1) 本庄博士 近世封建社會の研究 26頁

2) 大阪市史 索引 9-10頁

く悉く近江商人である。幕末の頃大阪の本町に於ては近江商人が軒を並べて大店舗を有したといはれて居る。

大阪に次いで商業の盛に行はれたところの江戸、京都及び名古屋等に於ても近江商人が主として其の商業上に活躍したのであつて、其の商取引の中心地である江戸の日本橋通町、京都の三條通には各々近江商人の店舗が並列して居た。實際日本橋の草分は、今日尙も盛大に營業して居る西川、伴等の近江商人であつた。<sup>3)</sup>當時江戸の商人に近江商人が多かつたことは、次の記事によつても想像される。<sup>4)</sup>

『一體御當地の商人は、多分近江、伊勢、三河國より出し者多し。其内三河より出たるにはさのみ大分銀も出来ざりしが、近江、伊勢より出たるは、悉く身上を捲へて、今近江屋、伊勢屋といへる質、兩替、酒屋の類多くありて、本店出店一家一門連々榮へ行、或は江戸は出店に成し、其身は本國に住居して、手も満き年々江戸より大金を取込なり』。

江戸に於ては近江商人と伊勢商人とは殆んど同等に活躍したが、伊勢商人は唯江戸に於てのみ活躍したにすぎなかつた。然るに近江商人は常に江戸に於てのみならず前に述べし如く我國第一の商業地たる大阪は勿論其の他全國至る所に於て活躍した。即ち北は未だ國權の充分に及ばない蝦夷地より、西は他國人の入國を禁止した薩摩、土佐に迄遠く麻布、吳服類を持下つたのであつて、其の他各都市の大商人中には近江出の者が多かつた。近江商人が都市の發達、即ち其の都市に於ける商業の繁榮に貢獻する所が少くなかつたことは、名古屋に關する一事件によつて之を推定することが出来る。即ち嘉永二年八幡町の領主たる尾州藩より第二回の御用金として調達講の

3) 伴家文書(日本橋附近の地圖)

4) 世事見聞錄 175-6頁

成立を命ぜられた時、其の成立意の如くならず、殊に神崎郡金堂の外村與左衛門は再三それに加入すべく交渉されたが、斷然之を拒絶した。其の結果、取扱人は其の講の不成立に就いての理由書を尾州藩に申達せざるを得ざるに至つたが、其の書中に、近江商人と名古屋の繁榮との關係を知るべき文言がある。それは次の如くである。

『外村與左衛門伴市兵衛口上之覺書』

此段調達、講右之者へ被仰付候に付き私共より懸合仕候處、右與左衛門始め市兵衛返答には、御講の儀者何方様より申被聞候ても私方家風にて加入之儀御斷申上候、尙又御諸家様並に御大名様へ金銀貸付取組之儀も是又家の法度にて御斷申上候——  
——御講御斷申上候上は外村與左衛門も名古屋御府内へ商内御差留の儀は元より覺悟に御座候、右に付此與左衛門立入不申義相成候は、追々江州邊の商人迄も立入、自然手引少く相成候は、尾洲名古屋表可及衰微哉と存候など申恭致方も無御座仕合に奉存候——』

以上によつて近江商人が徳川時代の中頃以後全國各地に行商し、或は又其の地に店舗を出して、全國的に商取引をなせしことが明となつた。由是觀之我國の商業が近代的な發展を遂げた裏面には、近江商人の活動が與つて大に力があつたことが分る。恐らく近江商人の活動がなかつたならば、我國の商業は徳川時代にあれ程の發展を遂げ得なかつたであらう。

而して商業界に活躍した近江商人は、近江の到る所より出でたのではなく、主として、八幡、日野、五箇莊、愛知郡の所々、高宮、彦根、長濱等から出て居る。最も早く活動したのは、八幡出の商人であるが、其の八幡出の近江商人が如何に活躍したかは、岡田文園の「八幡誌」によつて

之を窺つてみよう。曰く

「其商業廣大流通なる事は、西は長崎薩摩、東は南部津輕は云に不及、松前箱館蝦夷地迄も行渡り、或は國々に出店を出し、或は海陸運漕往來して大利を營む事、誠に諸國商人の敢て及ぶ處にあらず、其仕法譬は國産は中に不及、京都大阪西國第一功名産を東國へ持下り、扁路には仙臺袴地、下野結城絨、出羽紅花、近代流行する上州桐生邊織物類、其外夷地の昆布、數の子類を積登りて上州西國等へ捌する事、大仕掛なる交易なり、かゝる故に其利分「ヒサゴ」の子を生ずる如し、其根元を尋るに金にアフミ賊人にアフミ賊」。

近江商人は舊に内地商業上に活躍したのみならず外國貿易上に於ても活動した。寛永年間に朱印船を出した西村太郎右衛門、岡地勘兵衛は八幡の出身であつて、前者は安南に、後者は暹羅に行つた者である。尙安南貿易に神崎郡の小幡商人が何等か關係して居たことは、次の事項によつて想像される。即ち朱印船を出した角倉與一より安南貿易に關して安南國に送つたところの文書並に永祚六年（安南の年號で、我寛永元年に當る）の日附のある安南よりの修好文書が神崎郡北五箇莊村小幡の正眼寺に所藏されて居り、又角倉與一の朱印船を歌つたと思はれる子守歌が今も尙同地方で歌はれて居る。徳川家光が若し海外渡航を禁止しなかつたならば、恐らく近江から多數の貿易商人が輩出したことであつたらう。

近江商人が貿易商人として活躍したことは、徳川の初期頃から始まつたのではなくて、既に足利時代から支那又は南洋方面に渡航し居たのである。之に就いては直接的の資料を缺ぐが、當時近江商人が當時の貿易港たりし堺で發展して居たこと及び支那方面へ渡航して居たことは、今

日尙傳つて居る商ひ踊り歌によつて想像される。又慶應年中蒲生郡東櫻谷村中の郷廣山の丘上より多數の支那錢が発見されたこと及び進貢船に乗つて貿易に従事した五山の僧と、佐久良谷の城主たりし小倉家との間の關係の密接なること等から推して、近江商人が既に足利時代から盛に海外へ渡航して居たことが分る。<sup>7)</sup>

我國の商業が、近世に於て國の内外を論せず、大發展をなせしことに就いて、近江商人の關與する所頗る大なりしことは以上によつても明かである。元來近江商人は上古より商業上に活躍したのであるが、近江商人としての特色を發揮したのは、貨幣經濟の普及した徳川時代の中頃以後のことである。<sup>8)</sup> 従つて近江商人は我國の經濟が土地經濟より貨幣經濟に進展して所謂「金の世の中」となるに就いて、又支配階級が武士階級より町人階級に移るに就いて、大に貢獻したのである。

### 三 近江商人と工業

我國の工業も商業と同じく徳川の中頃から發達したのであつて、其の組織も漸く手工業から家内工業へと進展し、中には資本的の經營も現はれて、商品生産が大に興るに至つた。<sup>1)</sup> 元來工業が未だ手工業時代にある時には、其の營業が小規模であるため、其處に商人の介在する餘地は殆んどあり得ない。然るに工業が發展して家内工業時代に進めば、其の工業に必要な原料を仕入れ、或は又其の生産したる商品を販賣するに就いて、是非其商人の仲介によらざるを得ないことにな

7) 中川泉三 堺港と近江商人(蒲生郡志 卷五 711-5頁)  
 8) 拙稿 近江商人の起源(經濟論叢 第二十六卷 第六號)  
 1) 本庄博士 近世封建社會の研究 25-6頁



る。即ち家内工業組織に進めば、其の規模大となるため、從來の如き小範圍内に於ては、原料の仕入又は生産品の販賣を完全に行ふことが出来なくなつて、終にかゝる事に就いて一層廣大なる知識を有する商人に其の援助を訴へざるを得なくなり、又大規模で工業生産が行はれることになる。勢ひ大資本を要することになるのであるが、元來製造工業人には夫程大なる資本を有せざるため、其の資金も商人より借らざるを得ないことになる。近江商人は始め其の商才によつて、製造工業人に原料を供給したり、又は其の製品の販賣に従事し、或は又其の擁したる資本を製造工業人に貸附けて、間接に工業に關係を有した。然るに返済期限に製造工業人より貸附金の返済を受けなかつた時には、已むを得ず自ら其の工業に参加せざるを得ないことになつた。かくの如き経過を経て、近江商人は我國の工業にも關係することになつたが、又其の資力の大きなるため、其の工業の發展を大に促すに至つた。而して又近江商人で工業に従事した者は、主として大資本を要した工業、例へば醸造業等に従事したであつて、殊に關東方面に於ける醸造業は殆んど近江商人の經營する所であつた。

而して近江商人で工業方面に活動した者は、主として日野出の商人である。日野は元來工業の盛んであつた土地であつて、日野商人は始め日野に於て生産せられた檜物即ち漆器を伊勢方面から中仙道筋に行商した。然し此の漆器所謂日野椀の販賣も貞享、元祿を其の最盛期となし、爾來其の需要激減したが、彼の會津名産の會津塗、信州飯田の漆器、名古屋の青貝塗等は皆日野商人によつて始められたものである。<sup>2)</sup>

2) 中川泉三 日野商人(諸生郡志 卷五 784頁)、牧野信之助 日野商人團の發達(歴史と地理 第二十二卷)

元祿以後日野商人の行商品として重要となつたものは賣藥であつて、正野玄三によつて調製された感應丸其の他の諸賣藥の販賣は、忽ちにして盛名を博し、其の結果として從來の漆器帷子類の行商より轉業する者が多くなつた。かくして賣藥の製造販賣に従事する者増加した結果、組合規約の必要を生じ、又多數同業者中には不正藥を販賣して世人を欺く者も生じたるため、終に不正競争を停止せしむる規約を設定する必要を生じた。寛保三年正月の規約及び同年四月領主の郡奉行に出した請書に連名した賣藥業者の數は實に百名以上にも達して居る。

其の後日野商人は漆器、賣藥の行商以外に時勢の推移によりて諸種の商業を創めて、諸國に店舗を有するに至つたが、前に述べし經過によつて、而かも主として關東地方に於て、醸造業に従事するに至つた。今具體的事例を抽出して見ると、高井作右衛門が關東に行商して後、上野藤岡に醸造業を初めたのは元文の頃であり、島崎善兵衛が下野烏山に酒製造を始めたのは寶曆元年である。更に竹村茂兵衛は寶曆中下野谷田具に醬酒醸造を始め、矢尾喜兵衛も同じ頃武藏大宮に醸造業を營み、鈴木忠右衛門は延寶元年上野境に醸造業を始め後武藏行田及び熊谷にも其の支店を出し、藤崎宗兵衛は享保中上野鬼石に醸造業を始め、岡宗一郎は明和以後上野綱取、下野佐野、上野大間々等に醸造業を營み、外池宇兵衛は下野馬頭、常陸部垂太子、江戸等に醸造業を開き、久田武平は武藏児玉に、同圓藏は武藏鴻巣、並木、兒王及び宇都宮に醸造店を開き、杉澤五平は取手に酢醸造を始めて關東第一醸の名を博するに至つた。更に中島治右衛門は甲斐南部に、野田六左衛門は上野板鼻に醸造業を創めて、何れも成功し、山中正吉は駿河大間及び大宮に醸造業を

營んだ。<sup>4)</sup> 兎に角關東地方に於て醸造業に従事した近江商人が如何に多數であつたかは、幕末各地に於て有した醸造店、數によつて之を知ることが出来る。<sup>5)</sup>

以上によつて近江商人が殊に大資本を要する工業に従事したことを明にしたが、之によつて我國の工業が手工業より家内工業に、小規模經營より大規模經營に進展するに就いて、近江商人の活動に俟つた所のものの尠少でなかつたことが推測される。即ち近江商人が我國の工業の發達に盡した事績の甚だ大であつたことは之を輕視することが出来ない譯けである。

#### 四 近江商人と北海道開發

蝦夷地に於ては米を産しなかつたため、松前氏は他藩と異つて藩士に給地した。之を支配處持或は場所持と稱して、切米取よりも尊敬せられるを常とした。即ち松前氏は蝦夷地を數多の場所に區劃して之を家中に給したのであつて、藩士は其の場所に於て主として蝦夷と交易し、其の利潤によつて其の生計を支持した。而して其の交易には代理者を遣し、又は其の場所の知行主自ら赴いたが、固よりかゝる交易に不慣れの者であつたため、知行主は自ら交易を行はすして、之を商人に請負はしめ、坐して料金を收得することゝなり、或は商人に債務を負ひて返済し得ざる結果、場所交易を商人に託して、其の料金を以て其の債務の償却に當てることゝなつた。此の商人を請負人、料金を運上金、交易所を運上所と稱した。當時如何にして商人が場所請負人となつたかは、享保二年に著はされた「松前蝦夷記」によつて明らかである。即ち曰く

4) 牧野信之助 前掲書、平瀬光慶 近江商人

5) 中川泉三 蒲生商人出店表(蒲生郡志卷五 881-897頁)

『蝦夷地の内、六十一箇所、家中給分代に渡し置場所有之候えども、夷人より收納無之、銘々より夷人に向申候品を、船にて差越、雜物替いたし申候て、其利金取計のよし。併近年出物蝦夷地不漁ゆへに、少く船数を遣はし候えども、損毛計出来申候、家中申合、少々宛寄合船にて差遣申候。尤商人船にて運上金を取り、其場所相渡し申も有之候。依之近年家中困窮のよし』。

而して此の請負人は知行主よりも營利に機敏であつたため、其の産物の増加を計つて利得せんとしたのであつて、其の手段として蝦夷に漁法を教へ、或は蝦夷を使役して漁業を営み、或は水産製造を改良し、後には和人を交へて漁業を営み、其の結果として北海道の漁業は大に發達した。然るに此の場所請負人となつた商人の多くは、近江商人であつたのである。

初め松前の人民は諸國より移住せし者若くは其の子孫であつて、就中奥羽地方の者が多かつた。然し乍ら其の資力の乏しかつたため、産業發達せず、商業も亦他國の船舶の來るを待つて行はれたにすぎなかつたが、天正、慶長の頃より近江商人の來るに及んで、漸く其の面目を一新するに至つた。

最も早く北海道に渡來した近江商人は愛知郡柳川出身の建部七郎右衛門及び田付新助であつた。建部は既に天正十六年に蔬菜種子の行商人となつて松前に渡來し、後屢々往復して松前の状況を視察し、遂に小濱敦賀に於て巨船を造り、敦賀より米味噌其の他諸品を松前に輸送した。田付新助も松前に往復して、商業及び漁業に従事し、松前に數多の漁場を開いた。其の後之に倣つて柳川、薩摩及び八幡より北海道へ渡來する者多く、其の多數は夫れく成功して豪商となつた。而して北海道に於ける近江商人は、之を兩濱町人と稱して藩主より特別の待遇を受けた。兩

濱町人のことに就いては「東遊記」に次の如く出て居る。

『兩濱町人と號くるものあり、此語を尋るに、元來此地產物澤山の地なりと雖も、はじめは今の如く諸國へひろまらず、漁獵を業とするもの、もとこれを續くる者なかりけるに、江州八幡、柳川の町人、此地を見立て店を出し、米、味噌醬式を仕送りけるより、漁獵獲き年々につのり、稼ぎ方も逐年ひろまりけるより、兩濱町人と申、領主目通りをゆるされ、外町人より重んずることになりしとぞ』。

兩濱町人は總べて團體的に即ち兩濱組として活動したのであつた。例へば松前侯より御用金を仰付けられる場合には、寶曆十二年の例に於ては其の金額千兩を兩濱組へ仰付け、其の千兩は兩濱組に屬した近江商人が之を其の分限に應じて負擔したのであつて、兩濱組が松前侯の御用金を如何に多く引受けたかは、兩濱組に屬した近江商人の一員たる西川家に今日尙殘つて居る文書即ち「兩濱組中より御用金滯高書」によつて之を知ることが出来る。又北海道の產物たる俵物を長崎港へ販賣するに就いても、主として兩濱組が關係した。兎に角福山城下並に江差城下に大なる店舗及び倉庫を有した者は殆んど近江商人であつて、天明六年佐藤玄六郎より提出した「他國より罷越蝦夷地交易仕候名前書付」中に出て居るところの北海道に於ける富豪十七名の内、近江商人は實に十一名を占めて居る。尙近江商人が如何に多く北海道に於て活躍したかは、左の記事によつても之を知ることが出来る。

『松前町並西郷江指村にて店商仕候もの、地の者會て無之、大形近江國、若州、能州、加州の者、家を借り役金を出し商賣致す由』。

2) 同上 133-138頁  
3) 西川家文書(柳川區會文書)  
4) 西川家文書(天明四年)  
5) 田付家屏風、宮川家文書(福山城下地圖)  
6) 西川家文書

『城下の商賈人といふは、皆他國のものにして、江州大溝、八幡、薩摩村等のもの多く、加賀、能登、出羽海邊のもの多し』<sup>8)</sup>  
『當時(天明年間……筆者註)は兩濱町人の外北近江の者多く店を出し、漁獵の仕送り、蝦夷地の交易など引受侍る』<sup>9)</sup>

之を要するに近江商人は日用品の缺乏せる松前に、種々の物品を移入して其の供給を豊富ならしめ、又松前の産物を各地に移出して、其の販路を擴張した。而してかくの如く商業上に近江商人が活動し得たのは、彼等が廣く各地に商業を營んで各地の状況に通せるのみならず、其の主なる者は船舶を所有して、運輸と商業とを兼ねたためである。當時近江商人が巨船を有して居たことは、今日尚殘存して居るところの、柳川及び八幡の氏神へ献上した近江商人の繪馬額によつて之を知ることが出来る。尙松前の漁業は其の初めは甚だ幼稚であつたが、其の場所請負人となつた後に於ては、近江商人は資本を投じて新に漁場を開き、漁法を改良し、窮乏せる漁民には日用品を貸し、其の漁獲品を以て之を償はしめて、大に漁業の發達を計つたものである。<sup>10)</sup>

以上によつて明である如く、近江商人は北海道に於ては或は商業に、或は航海業に、或は又漁業に活躍したのであつて、松前の商權及び金權は殆んど近江商人の掌握する所となつたのである。従つて又吾々は、近江商人が北海道の經濟的開發の第一人者であつたといふことを忘れてはならぬ。

## 五 近江商人と金融

以上述べし如く、近江商人は或は商業上に、或は工業上に、或は又北海道開發上に活躍したた

7) 松前蝦夷記

8) 北海隨筆

9) 東遊記

10) 北海道史 137頁

め、彼等は悉く富有となつた。其の結果として近江商人は、時を同うして盛んとなつた金融業務上にも、大に活躍するに至つた。

徳川の中頃以後金融なる經濟現象が盛んに現はれるに至つたが、其の資金の需要は生産消費の兩方面から生じた。即ち商工業の勃興に従つて其の營業の規模大となつたため、他人の資金を運用することが盛んとなつた。茲に於て資金を多く所有したところの近江商人が、商工業方面に其の資金を融通したことは申す迄もない。即ち近江商人は生産資金を諸方面に供給したのである。

生産資金の需要の盛んになりしと同時に、消費資金の需要も盛んになつた。抑も貨幣經濟の普及によつて打撃を受けし者は、即ち土地經濟に其の生活の根據を置きし者であつた。従つて貨幣經濟の普及するに至つた徳川の中頃以後に於て、生活困難を來した者は、徳川幕府を始として、諸大名、武士及び農民である。幕府及び諸大名は種々の方策によつて其の財政困難を救はんとしたのであるが、其の一策として富商より借財することが行はれた。次に、一方に於て生活は向上し、他方に於て其の収入の減少した武士階級も亦、其の生活を支持するため、借金生活をせざるを得ざるに至つた。即ち彼等は札差、御用商人等より借金して辛くも其の生活を支持し得たのである。<sup>2)</sup>最後に、土地を以て其の生活の全部となすところの農民も、其の生活向上並に領主よりの苛斂誅求によつて、到底農業よりの収入のみでは其の生活を支持し得ないことになつた。<sup>3)</sup>かくの如くして貨幣經濟の發達に隨伴して、消費資金の需要が盛んとなつて來たのであるが、其の資金の供給に近江商人が大に活躍して居るのである。

1) 本庄博士：前掲書 29-54頁

2) 同上 55-87頁

3) 同上 97-128頁

元祿前後五六十年間に大名貸其の他によつて破産したところの京都の商人のことが「町人考見録」に見えて居るが、此の大名貸を近江商人は盛んにしたのであつて、又其の貸倒となつたものも多かつた殊に此の諸大名への貸金の内、明治六年三月の太政官布告によつて、天保十四年前の分は、全部公債に立てないこと即ち帳消にせられたため、近江商人の受けた打撃は蓋し少くなつた。今日尙も天保十四年前の日附のある諸大名の借用證書は、近江商人の家に於て散見する所であるが、此等の證書によりても近江商人が如何に多く諸大名及び武士達へ貸金して居たかが分る。實に近江は我國に於ける金融の中心地となつたのであつて、生産及び消費資金の供給は近江商人の多く掌握する所であつた。當時近江が我國に於ける金融の中心地であつたことは、紀州侯の「紀州御貸附京都出張御用所」が八幡に設けられたことによつて證明せられる。之は天保七年六月より天保十三年迄存在したのであつて、名目銀に類する貸金をなした。即ち表面上は紀州侯が貸主となつたが、實際の貸主は近江商人であつて、紀州侯は之によつて手数料を儲け、近江商人は之によつて其の貸倒を防止したのである。尙天保十三年に八幡が天領より尾州領に變じたのも、富豪の多い八幡を尾州藩が手に入れんとした努力の結果である。更に幕末兵庫開港のために泰西に存在したコンペニーに基いて商社が大阪に設立されたが、其の商社設立の献策書が小栗上野介の主唱で慶應三年四月勘定奉行塚原但馬守、同小栗上野介、同服部筑前守、勘定奉行並星野豊後守の四名連署して幕府へ提出された。其の献策書の中に、商社に加入すべき者として近江の豪商が挙げられて居る。

『(前略)尤廿人にて百萬は大數之如く候得共右廿人商社頭取に相成候事故五畿内は不申及近國之内には加り候べき有之就中東西

4) 三井高房 町人考見録(徳川時代商業叢書第一)

5) 松居家文書、數江家文書

6) 勝安房 開國起原(海舟全集 第二卷 600頁)



近江之豪商其組合に屬し可申候間百萬兩位は出來可申と奉存候(以下略す)』

之によつても近江に富豪が多數存在したことが分る。

最後に明治新政府も初め其の財政の窮乏に困厄した、め、終に其の財政の基礎を確立せんとし、明治元年正月廿九日に三百萬兩の會計御基金といふ内國債を募集することにした。其の應募者には天下の富豪が擧げられたのであるが、其の内に近江商人が含まれたことは勿論のことである。それより前既に正月廿一日に金穀出納所は三井組以下金穀御用の商人を召して京畿間富豪家の姓名を質問した、め、三井組其の他の商人は、廿二日に左の富豪名簿三冊を奉呈した。<sup>7)</sup>

一、京都并近江荒増名前書

一、大阪荒増名前書附攝州

一、江州荒増名前書附勢州

一冊

一冊

一冊

以上によつて近江が我國に於ける金融の中心地であつたことが分るのであつて、近江商人が我國の金融上に占めた地位の如何に重要であつたかは、之を想像するに難くない。

而して近江の土地が金融の中心地となつたのみならず、各地にあつた質及び兩替商の多くが又近江商人であつた。即ち江戸に於て其の多くが近江商人であつたことは、先に引いた「世事見聞録」に見えて居り、徳川時代に天下の臺所といはれ、或は又我國の富の七分迄も集中して居たといふ大阪に於ても、有力なる兩替商は近江商人であつた。即ち大阪の富の八割を掌握したといふ鴻池は近江出である。以上によつて徳川時代の中頃より明治の初年に亘つて、近江商人が我國の金權を左右したことが分る。

7) 三井家奉公履歴 13頁

8) 九桂草堂隨筆(百家隨筆第一 106頁)

## 六 結 語

我國の經濟は最近異常なる發展を遂げたが、之は明治維新後の出來事である。一度鎖國の迷夢覺むるや、上下舉つて燦然たる泰西の文化を我國に移入することに汲々とした。之に隨伴して經濟活動上にも新生命が喚起され、既に泰西に於て發生して居たところの資本主義的經濟組織に進展することになった。従つて明治維新後我國の經濟が異常な發展を遂げたといふことは、取りも直さず資本主義的に發展したことを意味する。

而して明治維新後かくの如くに我國の經濟が資本主義的に大躍進することが出來たに就いては、其處に其の躍進に對する準備が前以て完成されて居た筈である。宜なる哉。我國の經濟が資本主義的に發展するに至る準備時代、即ち前資本主義時代が既に徳川の中頃から發生して居た。而して此の前資本主義時代に於て重要な役割を演ずる者は即ち商人である。換言すれば此の時代は商業資本家の活躍時代であつて、商人が總べての經濟活動上に重要な役割を演ずる。我國に於ける前資本主義時代即ち徳川時代の後半期に於て、主演者であつた商人の内で重きをなした者は即ち近江商人である。近江商人が前資本主義時代に於て如何に活躍したかは、各經濟活動上に就いて前に之を述べしが如くであつて、又近江商人は此の時代に最も活躍したのである。かくの如く觀察すれば、我國の經濟が前資本主義時代に進展するに就いて、又其の完成を遂げるに就いて、將又資本主義的に發達するに就いて、近江商人が我國の經濟の發展上に貢獻する所極めて大であつたといはねばならぬ。従つて又日本經濟史上に於て、近江商人の占むる地位の決して輕視すべからざることも明らかであらう。